

■個人論文

中英語の「 minstrel」

— 中世イギリスの芸能研究序論 —

末松良道

1

14世紀イギリスの大詩人、ウィリアム・ラングランドの『農夫ピアズの幻想』(*Piers Plowman*)のプロローグで、作者のラングランドはイングランドの社会の縮図を職業別に描写し、時として辛辣な風刺の筆をふるう。そこに描かれる人々の中に次のような連中がいる。

ある者は職業的吟遊詩人(munstrals)となって陽気に笑いさざめき、罪のない音楽などの余興で金を稼ぐ。しかし、よくしゃべり、冗談をいう俗悪な講談師(iapers and iangelers)、ユダの子供たちは、勝手に珍奇な空想話(fantasyes)をでっちあげ、馬鹿(fooles)をよそおい笑いものになるが、その気になって働けば、思いのままになるくらいに才覚は十分持ちあわせている。聖パウロが彼らについて説教していることを、ここで確認するつもりはない。「下劣なことを言う者」はルシフェルの家来であるのだ。¹⁾

詩人はこれらの芸人達に対し、なかなか手厳しい。この文章の次には役立たずの浮浪者や盗賊の一党について語られるので、ラングランドから見ると、芸人も浮浪者や盗賊に近い、人間社会の底辺をたむろする害虫ということになるのだろうか。

私はここに出てくる“munstrals”という言

葉について疑問と関心を持ち続けてきた。現代英語でいうところの minstrel、中世ラテン語の ministrallus は一体どういった人達をさすのであろうか。私の研究の中心的な分野である中世英国の演劇を考えるにあたって、役者(actor、player)という単語が支配的に使われる以前の役者やそれに類した職業に関する表現は極めて多岐に及んでいる。その中でも頻繁に使われるのが minstrel という表現である。これら演劇や芸能に携わった人々を表す語彙を調べることは中世の演劇や芸能全般に関する問題を掘りおこすことになるだろう。本論では、まず、私が抱いている問題意識を整理して、今後の研究の序論とすることを意図している。

2

ではまず、『農夫ピアズ』の一節に立ち戻ろう。この作品の日本語訳につけた注において、池上忠弘氏は、“munstrals”を次のように解説する。

専門的な芸人であり、本来は音楽士というよりは器楽演奏家であつたらしいが、本当のところは今でもよくわからない中世の職種である。その仕事も詩を語ったりするだけではなくいろいろな芸をしてみせる者も含まれていたようで、王侯に仕えるピンから辻で物乞いをする乞食同前のキリまであつたらしい。ラングランドは王侯貴族に仕え

定期的にたづねて物語を語ったり芸をしたりしてみせる芸人を考えていたようで、猥談をやったり詐欺行為をやったりして「ユダの子供たち」といわれている放浪の jongleur とを区別していたようである。²⁾

この解説は J. A. W. ベネットの編による刊本の注に似ているので、池上氏はベネットを参考にされたのかもしれない。ベネットは、「彼らは専門的なエンタティナーであって、本質的には、歌手というより器楽演奏家である (essentially instrumentalists)」と言う³⁾。いずれにせよ、ラングランドは芸人にも2種類あって、罪のない楽士と、ろくでもない法螺話をして不当なやり方で生計を立てるごろつきとがいる、と書いている。しかし、 minstrel と呼ばれる人々が一体どういう職業の人々かは、ここでは極めて曖昧である。“iaper and iangelers” というのが明らかに否定的な言葉であるのに対し、“munstrals” はラングランドによればまともな芸人を指すということになるろうか。しかしラングランドがここでそうしている様に、当時のイングランドにおいて、一般に、詩人だけに限らずまともな芸人だけ minstrel と呼ばれ、その他は jongleur などと呼び分けられていたかは、この短い一節だけではもちろん分からない。ウォルター W. スキートの刊本の注では、様々な芸人を指す言葉 (gleemen, jangelers, jesters, japers, disours, joungeours, etc.) を minstrel と特に区別せず、芸人一般をひっくるめて解説している⁴⁾。同様に、A. J. ミルズや E. K. チェンバースの様な権威ある先人も minstrel について、細かい区別をしておらず、他の類語と共に様々な芸人を指すことの出来る語彙として扱っている⁵⁾。しかし、如何に一般的な語とは言っても、ラングランドの例もそうであるように、微妙なニュアンスや使い方の差があるかもしれない。辞書やグロッサリーの定義にととも

に、作品における文脈を見ることが大切だろう。

さしあたり中英語の文学作品をいくつか調べてみると、 minstrel が主としてベネットの言うように本質的には「器楽演奏家」であったことを示す文に出会う。14世紀の韻文ロマンス『サー・オルフェオ』(Sir Orfeo)では、死んだ妻の住む地下の妖精の国に行くオルフェオは、みずばらしいであろう巡礼の服を着て、堅琴を背負って出発する。彼は妖精の王の御前に現れた時、次のように言う。

オルフェオは言った、「王様、私は一介の貧しい minstrel (menstrel) にすぎません。そして、多くの領主様達のお屋敷にうかがうのが私共のならわしなのです。私共はたとえ歓迎されなくとも、音楽を奏でなければならぬのです。」

そう言ってオルフェオは王の前に座り、美しい音のでる彼の堅琴を手にとり、その音を出来るだけうまく合わせ、美しい音楽を演奏しはじめたのであった⁶⁾。

ここでは、オルフェオは楽士であり、楽器を演じるだけであって、物語を語ったり、いわんや、踊ったり、馬鹿な話を演じてみせるようなその他の芸はしない。しかし、彼は自分達 minstrel を領主の館を渡り歩く放浪の身の上であるとしている。

同様の例は、中英語末期のコーパス・クリスティ・サイクル劇の中にもある。Nタウン・サイクルの18番の劇(『東方の3博士』)の冒頭、ヘロデ王は大声で自己の権勢を自慢しつつ登場する。そこで彼は騎士や兵隊達に命令を下すのであるが、その時彼は minstrel にも次のように命ずる。

余は、速やかに馬から降りて、宮廷の豪華な広間に急いで行くことにしよう。mins

ト
る
この場
宮廷の
ドの言
ミン
葉とし
の意味
ド英語
辞典(庄
倒角
ルと道
思われ
チ:
物語』
の話
宮廷
傾け
ンス
合と
かし
違っ
物語
of S
は自
(my
のよ

非常
館』
この

トレル達よ、余が寝室に行って服を着替える間、高らかに音楽を奏でよ⁷⁾。

この場合にヘロデが呼びかけた minstrels は宮廷のおかえ楽士のようにあり、ラングランドの言う minstrels に最も近いだろう。

Minstrels が、なによりもまず楽士を指す言葉としてあったことは、類語である “minstralsie” の意味を見ると納得できる。『オックスフォード英語大辞典(OED)』においても『中英語大辞典(MED)』においても、この語の語義は、圧倒的に音楽に関わるものであり、Minstrels と違い、道化や物語の語りも意味し得るとは思われない⁸⁾。

Chaucer はどうであろうか。『カンタベリ物語』(The Canterbury Tales)の「見習い騎士の話」(The Friar's Tale)では、東方の王の宮廷で、王が宴席で minstrels の音楽に耳を傾けるという場面がある⁹⁾。従ってこの際の minstrels は、前述の N-Town Cycle の場合と同様の人々を指していると考えられる。しかし、他の箇所では、Minstrels はいくらか違った人々を指している。同じく『カンタベリ物語』中の「サー・トパスの話」(The Tale of Sir Thopas)では、主人公のサー・トパスは自分を楽ませるために一群の「陽気な男達」(myrie men)を連れており、これらの人々に次のように呼びかける。

サー・トパスは言った、「やって来い、わが minstrels よ、そして道化師(geestours)よ。私が武具を身につける間、高貴な物語を、法王や枢機卿や恋愛の物語を語るのだ。」¹⁰⁾

非常に似通った表現は、Chaucer の『名声の館』(The House of Fame)にも見いだされる。この作品の第3巻では、「名声の館」には、

「哀しみや欲びについての、名声に属するありとあらゆる話をする、様々な minstrels と道化(geestours)がいる」と書かれている¹¹⁾。Chaucer からのこれら2つの例では、Minstrels と “geestours”(“gestiours”)は一緒に扱われていると言って良いのではないか。ここで、問題を複雑にするのは “gestiours”(仮に、現代の jester の語義を使って「道化」と訳してみた)が一体何を表すかも曖昧であるという点だ。しかし、あまり対象語彙を広げても本論の枠を大きくはみ出してしまうので、ここでは、Minstrels が単に音楽を奏でるだけではなくさうだ、という点を確認するとどめたい。つまり、Chaucer にとって、「Minstrels」は器楽演奏だけではなく、物語を語る人もさしていたのだろう。

同様の例は、演劇上演資料等からも引きだせるようだ。『英国初期演劇資料集』(Records of Early English Drama、以下 REED)のニューカッスル・アボン・タインの巻の編者 J.J. Anderson は、彼のイントロダクションにおいて「楽士、役者、その他のエンタティナー」と題した一項をもうけて minstrels にも触れ、次のように例をあげて述べている。

Minstrels も、たいていは、そして第一には、音楽家を指す。しかし、この語彙はより広い意味を持つかもしれない。1560年代と70年代の市の出納係の記録によると、道化と minstrels (“Iestars & mynstrilles”)に対し市長が5ポンドを年に数回払っている¹²⁾。

しかし、音楽を奏でる人と物語を語る人の差は紙一重である。口承文芸が主体であった時代においては、物語の朗読に堅琴などの伴奏をつけるのはごく自然な行為である。器楽を演奏すること、歌を歌うことと、物語を語ることの3

このラテン語語源に含まれる「使用人」の意味は、古フランス語にも受けつがれた。『ラルース古フランス語辞典』においても、古フランス語“menestrel, menestereil”の意味として、「城を巡歴し、詩を詠ったりファブリオーを語ったりする詩人、楽士」といった定義と並んで、「使用人(serviteur)」や「労働者、職人(ouvrier, artisan)」が挙げられている¹⁸⁾。

同時代のラテン語やフランス語の同系語においてこのような意味でも使われていたならば、中英語においてもまったく事例がないほうが不思議である。事実、『オックスフォード英語大辞典(OED)』には、1例のみではあるが、『修道女の手引き』(Ancrene Wisse)(1225頃)からの例として、次のような一節が引用されている。

一方で、これら二人の使用人(menestraws)が、どの様な二つの仕事(moesters)をして、彼らの領主、即ち地獄の悪魔、に仕えるかによく注意を払いなさい¹⁹⁾。

この例の“menestraws”は、文脈においては「お世辞を言う人や陰口を言う人」を指すとOEDにあり、また、文中の“moesters”や、彼らが領主に仕えている事実からしても、ある種のエンタティナーを表すのではなく、明らかに「使用人」の意味で使われている。

『修道女の戒律』は13世紀初期の作品であり、アビゲイル・アン・ヤングが中世ラテン語のministrallusについて言ったように、中英語の minstrel も初期にはわずかながら「使用人」の意味で使われたが、すぐにエンタティナーのことを特定するようになったのだろうか。しかし、『修道女の手引き』という文献の宗教散文という性質から、この例が中世ラテン語や古フランス語の直訳か、影響の孤立した表れとも見ることができる。1例のみでは明らかかなことは

言えない。もし、このような「使用人」の意味がある程度定着していたと仮定した場合、それはどのくらい後まで生き残ったのかという疑問がわく。『中英語大辞典(MED)』でも、この意味における例文は、「楽士、芸人」の意味における数十の例文と比べ、ただの2例しか記載されていない。しかも、そのうちの1例はOEDと同じく『修道女の手引き』の前述の例である。しかし、もう1例は1400年頃の例であるから、初期中英語で完全にこの意味がなくなってしまったのではないかもしれない²⁰⁾。例えば、チャーサーやラングランドの頃の中英語にもそういうニュアンスは「一般的に」残っていたのだろうか。『農夫ピアズ』の頃、芸能と切り離して、「ミントレル」と人が呼ばれることがあったのであろうか。今後、テキストを読む上で常に注意を払いたい。

4

こうして、ヤングの論文に導かれ、もうひとつのミントレルの意味を検討した。では、私にとって残された課題は何か。中英語のミントレルをもっと広範な文献を精査して、意味を検討すべきなのは言うまでもない。そして、その際、文学研究者としては、単なる語義だけでなく、そこに現れるミントレルの社会階層や雇用関係、扱う楽器や芸の種類なども考慮する必要があるだろう。更に、ミントレルの意味を概観して分かったのは、この語に類する多くの中英語語彙の意味についてもそれほどはっきりしていないということだ。例えば、既に例文中に出てきた“gestour”(jester)、foolをはじめ、wait や“jogelour”(juggler, magician)、japer(trickster)等々の語彙も、それぞれ多様な側面を持っているはずであり、細かく検討する価値がある。フールに関しては、シェークスピアにあらわれるフールやルネッサンス期のフー

ルを中心に詳しく研究されているが、それがミ
ンストレルというカテゴリーとどのような関係
にあったのだろうか。コート・フルをめぐ
る考察が中世・ルネッサンスの王権概念の問題や、
広く宮廷文化一般の問題に繋がっていくように、
ミンストレルについての問いかけも中世の芸能
や民衆文化一般に関する大きな括弧を内包し
ているだろう。ヤングも言うように、多くの情
報が研究されるのを待っている²¹⁾。こういっ
た、今後の研究の課題がかいま見えてきたとこ
ろで、この序論を閉じたい。

注

- 1) William Langland, *The Vision of William concerning Piers the Plowman and Richard the Redeless*, ed. Walter W. Skeat (Oxford: Oxford Univ. Press, 1886; rpt. 1979) 2 Vols, Vol.1, A text, ll.33-39. 訳文は次のものを使用させていただいた。W・ラングランド『農夫ピアズの幻想』池上忠彦訳(中央公論社、1993) p.20.
- 2) 池上訳、『農夫ピアズの幻想』 p.150.
- 3) William Langland, *Piers Plowman, the Prologue and Passus I-VII of the B Text*, ed. J.A.W. Bennett (Oxford: Oxford Univ. Press, 1972, rpt. 1988) p.84.
- 4) *Piers Plowman*, ed. Walter W. Skeat, Vol.2, pp.5-6.
- 5) Anna Jean Mills, *Mediaeval Plays in Scotland* (1924; rpt. New York: Benjamin Blom, 1969) p.42; E.K. Chambers, *The Mediaeval Stage* (Oxford: Oxford Univ. Press, 1903; rpt.,1967) 2 Vols, Vol.2, p.232.
- 6) *Sir Orfeo*, ll.405-414 in *Middle English Verse Romances*, ed. Donald B. Sands (New York: Holt, Rinehart and Winston, 1966).
- 7) *The N-Town Play*, ed. Stephen Spector, EETS, S.S.11 (Oxford: Oxford Univ. Press, 1991) 2 Vols, Vol.1, Play 18, ll.17-20.
- 8) *The Middle English Dictionary*, ed. Hans Kurath et al. (Ann Arbor: The Univ. of Michigan Press, 1952-).
- 9) Geoffrey Chaucer, *The Canterbury Tales*, Fragment V, ll.79ff. in *The Works of Geoffrey Chaucer*, Second Edition, ed. F.N. Robinson (Oxford: Oxford Univ. Press, 1957). 以下のチ ョーサーの作品の引用はこの刊本による。
- 10) *Ibid.*, Fragment VII, ll.845-50.
- 11) Geoffrey Chaucer, *The House of Fame*, ll.1193ff.
- 12) *Newcastle Upon Tyne*, ed. J.J. Anderson, *Records of Early English Drama* (Toronto: University of Toronto Press, 1982), p.xvi.
- 13) *Two Coventry Corpus Christi Plays*, Second Edition, ed. Hardin Craig, EETS E.S. 82 (Oxford: Oxford Univ. Press, 1957; rpt. 1967) p.97.
- 14) Abigail Ann Young, "Plays and Players: the Latin Terms for Performance," *Records of Early English Drama Newsletter (REEDN)* 9 (1984.2) pp.56-62 and *REEDN* 10 (1985.1) pp.9-16; "Minstrels and Minstrelsy: Household Retainers or Instrumentalists?" *REEDN*, 20 (1995.1) pp.11-17.
- 15) Young 1984, p.62.
- 16) Young 1995.
- 17) *Ibid.*, p.16.
- 18) *Dictionnaire de l'ancien français jusqu'au milieu du XIV^e siècle*, ed. A.J. Greimas (Paris: Larousse, 1980).

- 19) *Ancrene Wisse*, ed. J.R.R. Tolkien, EETS O.S. 249 (Oxford: Oxford Univ. Press, 1962) p.45.
- 20) 極めて興味深いことに、この例は『農夫ピアズ』のCテキストの1写本からの例である。ラングランドは、「使用人」の意味でミンストレルを本当に使ったのだろうか、それとも写字生の個性、あるいは間違いだろうか。しかし、他の写本(スキートの採

用した綴り)はこの箇所で“mynestres”となっている。“mynestres”(minister)という語が「使用人」を意味するだけに、問題は答が出にくい。このように、綴りも意味も類似した語との異同の1例だけでは、ラングランド自身のこの語の理解に絞っても、はっきりしたことは何も言えないであろう。

- 21) Young 1985, p.9.